

イチゴ鉢育苗の採苗時期について

利光 泰郎・永松 栄子 (大分県農業技術センター)

TOSHIMITSU, Y. and E. NAGAMATSU: Starting Time on Raising Seedling of Strawberry in Pot

最近、促成栽培地帯で収穫期の前進化をはかるために鉢育苗を導入されようとしている。一般に、鉢育苗はランナーを直接鉢に挿す方法が行われているが、採苗時期が5月から7月にわたっている。採苗時期が花芽分化期、収穫及び収量に及ぼす影響を品種との関連で検討したので報告する。

1. 試験方法

品種は“はるのか”並びに“てるのか”を供試した。採苗は1978年5月20日、6月10日及び7月10日に行ったが、第3葉が展開したランナーを床土を詰めた黒色の12cmポリ鉢に挿した。床土は細砂：もみがらくん炭=3：1の割合で混合したものをを用いた。肥料はOK-F-1(大塚化学製)を800倍に希釈し、鉢当たり100mlを7月30日までに4回施用した。ただし、5月20日採苗区は5回とした。対照区として、7月10日に地床に仮植したランナーを慣行にしたがって育苗する区を設けた。定植は9月21日に行い、栽植距離は120cm×20cm(2条)とした。定植後の管理は促成栽培における通常の管理を行った。なお、“てるのか”のみ10月23日にジベレリン10ppmを株当たり5ml処理した。

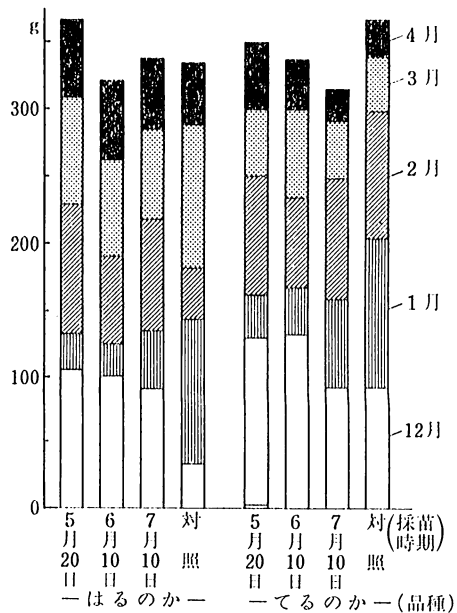
2. 結果及び考察

育苗初期の苗はやや徒長気味に生育し、“はるのか”がよく伸びる傾向がみられた。施肥を中止した8月上旬以後はかん水のみ行ったが、8月中旬以後は葉柄及び葉身の伸びが劣り、特に葉柄にアントシアンが強く発生した。定植時の苗の大きさは、採苗時期による差が少ないが、対照区と比較すると葉柄長、葉身長及び葉幅が著しく小さかった。しかし、クラウンの肥大は採苗時期が早いほど優れ、5月20日採苗区では13mmとなり、対照区より大きくなった。花芽分化期は“はるのか”では5月20日及び6月10日採苗区で9月7日に認められ、7月10日区では2日遅れ、慣行区でさらに4日遅れた。“てるのか”は5月20日区で9月19日に花芽分化したが、採苗時期の差によって“はるのか”と同様の傾向が認められた。出ら期及び開花期は花芽分化期と同様に採苗時期が早い区で早く始まった。収穫始めは“てるのか”が早く、5月20日採苗区で11月28日であった。採苗期が遅くなると遅れる傾向があり、7月10日採苗の対照区は12月13日に収穫が始まった。“はるのか”は鉢育苗区でいずれも12月4日で、対照区は12月14日であった。頂花房の花数

は、“はるのか”が株当たり15花で、“てるのか”は24花となり、区間の差は少ない。

11及び12月の収量は、“はるのか”では5月20日及び6月10日採苗区が株当たり105gで多く、7月10日採苗区がわずかに低かった。対照区は34gであった。2月28日まで及び4月9日までの総収量は5月20日区が株当たり366gで多く、7月10日区及び対照区の順であった。“てるのか”も初期の収量は5月20日及び6月10日区が多く、7月10日区は70%程度しか収穫できなかった。2月28日及び4月9日までの総収量は対照区が鉢育苗区より優れた。品種間では、早期の収量は“てるのか”が多いが、4月までの収量は“はるのか”の5月20日区が優れた。平均一果重は14~15gで差が少なかった。

以上の結果から、促成栽培で鉢育苗を行うと収穫期が前進することが明らかとなった。採苗時期は5月下旬から6月中旬までが適当と思われる。初期の収量は花数の多い品種の収量が多いが、成り疲れによる収穫の中休みが大きいため長期栽培に適さない。長期の栽培には“はるのか”のような果重型の品種が総収量が増えるので適すると考えられる。



第1図 月別収量(株当たり、4月9日まで)